

九州天皇家論 3章 神武東征

九州天皇家の誕生

神武九州天皇家の誕生

「菟田(宇陀)」で勝利した神武は「菟田縣」の魁師・「弟狛」から重要な情報を手に入れる。神武東征の当初の目的地は「菟田(宇陀)」であったと思われる。「菟田(宇陀)」とは小倉南区である。だが、「弟狛」の情報によって神武は新たに軍を興すこととなる。

時に、弟狛(おとうかし)又奏して曰さく、「倭國(やまとのくに)の磯城邑(しきのむら)に、磯城の八十梟師(やそたける)有(はべ)り。又高尾張邑(たかおはりのむら)に、赤銅(あかがね)の八十梟師有(はべ)り。此の類(ともがら)皆天皇と距(ふせ)き戦はむとす。臣、ひそかに天皇の為に憂へたてまつる。今當に天香具山の埴(はにつち)を取りて、天平瓦を造りて、天社國社の神を祭れ。然(しかう)して後に、虜(あた)を撃ちたまはば、除(はら)ひ易(やす)けむ」とまうす。(日本書紀・神武天皇)

神武が「弟狛」から得た情報は「倭國」に関するものであった。

- (1) 「弟狛」とは名前である。弟とは文字通り、弟である。名前は「狛」である。これは「カツ」と訓むべきであろう。
- (2) 「倭國」は「やまとのくに」と訓まれている。「やまとのくに」という訓みは神武建国後の国名である。しかし「弟狛(カツ)」の言葉は神武征服以前の国名であるから、「倭國」は本来の読みである「キコク」または「ワコク」と読むべきであろう。日本書紀は正しく国名を「倭國」と記録している。神武が侵入した國は「ワコク」「キコク」と呼ばれていた。
- (3) 「菟田縣」という行政区名が記されている。この「縣」という地方行政区は古代九州でのみ見られる行政区である。この行政区を定めた国家が「倭國」である。「菟田縣」の長官であった兄の「狛」は神武と戦い、弟の「狛」は神武に降った。従って弟の「狛」は本国が「倭國」であることを神武に知らせたのである。
- (4) 本国の「倭國」には二人の「八十梟師」が居る。「磯城邑」の八十梟師と「高尾張邑」の赤銅の八十梟師である。

「梟師」とはつぎのように考えられている。

勇ましく強い大将・昔、勇猛な野蛮人の長をいう (旺文社漢和辞典)
八十梟師とは武勇ある者の集団に対して名づけたものであろう (日本書紀頭注)

「梟師」は勇猛な野蛮人の長であると解釈しているが、倭國の二人の梟師は野蛮人ではない。神武は紀元前一世紀半の人である。この神武の時代に「倭國」の二人は「縣」という行政区を定めていた国家の指導者であった。当時の世界で見れば「倭國」の二人の「梟師」は最も先進的な国家の指導者というべきであろう。

- (5) 「梟師」が武勇のある者であるという解釈は正しい。だが、「梟師」の訓みは「タケル」であろう。「タケル」は「建」あるいは「武」という名前と考えるべきである。景行天皇の皇子が熊襲の王から「健(タケル)」という名前を与えられたという説話がある。この「建」は熊襲の王の名前であった。熊襲の王の伝統的な名前が「建」または「武」であった。「倭國」の二人の指導者も「建(タケル)」という伝統的な名前を名乗っていたのである。この名前

から判断すると「倭國」の二人も熊襲一族ということになろう。

(6) この二人を倒さなければ本当の勝利はない。彼らは神武に服従しない。彼らを征服すべきである。その為に「天香具山」の陶土を取ってきて瓦を焼き、天社、國社の神を祭れ。「弟狛」は神武にこのように進言した。

神武は「天(あま)」の子孫である。「天社」には彼の祖先が祀られていた。故に天の香具山の土で瓦を焼いて祀れ。弟の「狛(カツ)」はこのように進言したのである。そこで神武は「根椎津彦」と「弟狛」の二人を老人、老婆に変装させて、敵中を突破させ、「倭國」の天香山の土を持って帰らせた。

(7) 香春町は陶芸の町である。香春町発行の「史跡と陶里の町かわら」によれば現在窯は五つあるという。その中の一つ、「山陶庵邦日呂窯」は香春三の岳の中腹にある。「根椎津彦」と「弟狛」の説話に於ける「天の香具山」は香春岳である。埴土とは陶土である。神武はその土で「八十平瓦」を焼いて「丹生」の川上に上って、天神地祇を祀った。

(8) 「赤銅の八十梟師」の邑の名前は「高尾張邑」である。しかし、この「尾張」は現在の愛知県尾張ではない。「倭國」の中の「高尾張邑」である。従って北九州に存在した「尾張」である。「尾張」が登場するのは日本書紀神代紀下第九段である。

其の天火明命の児、天香具山は、是尾張連等が遠祖なり

ここでは天の香具山は尾張連の遠祖という。尾張とは元々彦島天王朝の人名であった。「高尾張邑」とは尾張一族が住む邑という意味である。「天の香具山」はその邑にあった。「天の香具山」とは香春岳である。尾張一族の邑は香春町に存在した。

(9) 神武紀に「高尾張邑」が登場するが、古事記景行天皇の倭健の説話にも「尾張」が度々登場する。

故、尾張國に到りて、尾張國造の祖、美夜受比売の家に入り座しき。乃ち婚ひせむと思ほししかども、亦還り上らむ時に婚ひせむと思ほして、期り定めて東の國に幸でまして、悉に山河の荒ぶる神、及伏はぬ人等を言向け和平したまひき。

其の國(甲斐國)より科野國に越えて、乃ち科野の坂の神を言向けて、尾張國に還り来て、先の日に期りたまひし美夜受比売の許に入り座しき。是に大御食献けり時、其の美夜受比売、大御酒盞を捧げて献けき。爾に美夜受比売、其れ意須比の裾に、月経著きたりき。故、其の月経を見て御歌曰みしたまひしく

ひさかたの 天の香具山 利鎌に さ渡る久毘 弱細 手弱腕を 枕かむ
あ はすれど さ寝むとは 我は思へど 汝が著せる 襲の裾に 月立ちにけり

とうたひたまひき。爾に美夜受比売、御歌に答えて曰ひしく

「尾張國」に「美夜受比売」の家があった。彼女の家から「天の香具山」が見えた。「天の香具山」とは香春岳一ノ岳である。倭健の歌は実景である。「尾張國」の「美夜受比売」の家は、香春岳が見える場所にあった。彼女は現在の香春町に住んでいたのである。古代「尾張國」は香春町に存在した。

(10) 倭建の「尾張」と「神武紀」の「高尾張邑」は同じ邑である。この「高尾張邑」の王が「赤銅(あかがね)の八十梟師」であった。何故、王は「赤銅」と云う名前を付けていたのであろうか。むろん「赤銅」とは銅に因んだ名前であろう。青銅器文明にとって最重要な金属、「銅」を名前とした理由は何であろうか。

実は香春岳は銅山であった。古くから銅を産出していた。風土記豊前國に次の記述がある。

田河の郡。鹿春の郷。此の郷の中に河あり。年魚(あゆ)あり。その源は、郡の東北のかた、杉山より出でて、直ぐに正西を指して流れ下りて、真瀨川に湊ひ会えり。此の瀬清浄し。因って清河原の村と号けき。今鹿春の郷というは訛れるなり。昔者、新羅の国の神、自ら渡りきたりて、此の河原に住みき。便即ち、名付けて鹿春の神という。また、郷の北に峰あり。頂きに沼あり。柘植の樹生きひ、また龍骨あり。第二の峰には銅、並びに柘植・龍骨等あり。第三の峰には龍骨あり。

この風土記は「豊前國」の風土記である。この「豊前」は大分県ではない。香春町である。「鹿春の郡」の中を川が流れる。東北の杉山から流れ出て真西に流れ真瀨川に合流する。「鹿春の郷」を流れる川とは金辺川であ

る。地図の如く、真西に流れている。真瀨川とは彦山川である。「鹿春」とはもともと「河原(かわら)」を意味した。



納行事が復活されたのですが、諸般の事情により存続が困難となり中止されました。なお私には残念ながら清祀殿と古宮八幡宮の関係は複雑すぎてよくわかりません。清祀殿の立て看板によると「宇佐神宮の放生会に奉納する御神鏡を初めて鑄造したのは養老四年（七二〇年）であろうといわれている。」また、十世紀に出来た延喜式によると、日本の銅の半分以上を香春岳の銅が受け持っていたとの事。奈良の大仏の鑄造事業が難航したときに、宇佐八幡が託宣を下して、その事業に協力を約束し「西海の銅」が使われたそうです。この西海の銅は、主として香春岳の銅が使われたといわれています。間歩といわれる主に黄銅鉱を採掘した鉱山の坑道もありますが深訪は危険を伴うので香春町郷土史会などの地元の方への事前連絡が必要です。

銅を語る上で香春町の伝承は、避けて通れないと思います。香春町には香春神社と現人神社の渡来神と思われる神を祭る神社があります。香春神が文献に初めて見られるのは、八世紀（七一三）、国ごとに編纂された豊前国風土記逸文の「鹿春郷」です。この文献により香春神社の、第一座の辛国息長大姫自命は朝鮮半島よりの渡来神と推察されています。香春町歴史探訪には新羅神「香春神社」と記載されています。銅は何らかの理由で新羅より日本に渡ってきた技術者により精銅されたと考えられています。私は戦前の日本による炭坑の労力としての強制連行、文禄、慶長の役の時代の陶工の強制連行、古代日本による精銅の技術者の強制連行が半島より、香春町を含む筑豊へと三次に渡って行われたと思います……。辛国息長大姫自命が新羅神とされる理由としては、辛国息長大姫自命の「辛国」は「韓国」と同義であるから新羅と通ずるとされる。田川市天台庵寺釜後から、新羅系の唐草模様がっている瓦が出土している。など書籍より拾ってみました。正倉院に、大宝二（七〇二）年の豊前国の戸籍帳が一部残っているそうですが、これによると秦という姓と、何々の勝（すぐり）というのがついた人たちが、七割から八割を占めているそうです。

(<http://homepage3.nifty.com/k-katsura/rekisi/seisiden.html>)

神武建国は香春町・田川市



三月の七日に、令を下して曰はく、「我東を征ちしより、茲に六年になりたり。頼（かうぶ）るに皇天の威を以てして、凶徒就戮されぬ。邊の土未だ清らず、餘の妖尚梗れたりと雖も、中州之地、復風塵無し。誠に皇都を恢（ひら）き廓（ひろ）めて、大壯を規り挙（つ）くるべし。而るを今運屯蒙に属ひて、民の心朴素なり。巢に棲み穴に住みて、習俗惟常となりたり。夫れ大人制を立てて、義必ず時に随ふ。苟（いやし）くも民に利有らば、何ぞ聖の造に妨はむ。且當に山林を抜き拂ひ、宮室を経営りて、恭みて實位に臨みて、元元（おほみたから）を鎮むべし。上は乾靈の國を授けたまひし徳に答へ、下は皇孫の正を養ひたまひし心を弘めむ。然して後に、六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇にせむこと、亦よからずや。觀れば、夫の畝傍山の東南の樞原の地は、蓋し国の奥區（もなかのくしら）か。治るべ

し」とのたまふ。

是の月に、即ち有司に命せて、帝宅を經り始む。

堂々たる建国の理念である。だが、神武の言葉であるかどうか。頭注は「文選、魏都賦」を基にして日本書紀編者が作成したものであろうと云う。文選を基にしていることはまちがいないであろうが、真実も含まれている。

神武の言葉、「觀れば、夫の畝傍山の東南の橿原の地は、蓋し国の塙區(もなかのくしら)か。治るべし」は真実である。「畝傍山」とは香春岳である。まさに畝の形をしている。

三つの山がまるで「畑の畝」の姿をしている。奈良飛鳥の畝傍山は「畝」の姿ではない。神武は「畝傍」の東南の地に都(宮処)を定めた。「畝傍山(香春岳)」の東南といえば香春町である。

ところで、「菟田」の長官である「弟狹」は、「倭國の磯城邑には磯城の八十梟師有り」と語った。彼の認識によれば香春町(田川市))は「倭國」と呼ばれていた。神武が「倭國」と名づけたのではない。神武侵攻以前すでにここは「倭國(ワコク・キコク)」と呼ばれていたのである。

(ja.wikipedia.org/wiki/畝傍山)

奈良・畝傍山



神武の宮室は香春町貴船神社

「畝傍山の東南の橿原」に都を定めたという記述は事実である。神武の宮室(おほみや)はどこに存在したのか。むろんその当時の神武の宮がそのまま現存することはあり得ない。神武が宮を作るとすればどこに作ったであろうか。ここ香春・田川は敵地であった。「民は素朴」と云っても、神武は征服者である。「倭國」の指導者の血縁者がまだ存在している。いつ報復の火の手が上がるかも知れない。「倭國」の人々から見れば神武は外来の侵入者である。聡明な神武は警戒を怠らなかったと思われる。部下を要所に配置している。また「倭國」の豪族と婚姻関係を結んで融和に努めている。新しく「犀川」出身の皇后を娶ったのもそのあらわれである。それでも自分の宮が攻撃されることを想定して、無防備な平地には作らなかったであろう。平和な時代ではないのである。防御を第一に考えて宮を作る場所を選んだでことであろう。

そう考えれば、宮室の建築場所は限定される。防御に適しているのは平野ではなく丘陵である。宮室の場所

について、「且當に山林を披き拂ひ、宮室(おほみや)を經營りて」と書いている。これは丘陵である。神武はその宮室を丘陵に造った。神武が「觀れば、夫の畝傍山の東南の橿原の地は、蓋し国の奥區(もなかのくしら)か。治るべし。」と宣言した場所はどこか。「畝傍山」とは香春岳である。神武の言葉に従うと、香春岳の東南に神武の宮室が存在したことになる。果たして、香春岳の東南の丘陵地帯に宮の跡が存在するであろうか。

神武が造った宮の場所には現在、香春・貴船神社が存在する。此处が日本書紀が「畝傍山の東南の橿原の地」と記録に残した神武の宮室である。HPに依ると、当代神主は40代目と書かれている。

下の航空写真を見てください。貴船神社の場所は、「畝傍山(香春三山)」のまさに東南の地にある。前には金辺川が流れ、後は山に守られた小高い丘である。防衛面でも十分である。西には田川盆地が開けている。

今から2000年以上も前に、彦島「吉備」を出立して関門海峡を北東に進み、企救半島北端を迂回して周防灘を南下し、小倉南区に侵入し、山城に立てこもる敵に勝利し、続いて香春まで遠征し、「倭國」の王を倒して建国を宣言した若き神武の御所は、香春町、貴船神社である。

奈良の橿原神宮は平地に存在する。この神社は平和な近世に建造された神社である。強大な「倭國」の一角を破って國を拓き、絶えず反攻の恐れの中で王朝を建設していった神武の危機意識とは無縁な「奈良橿原神宮」というべきであろう。



神武二年に神武は功を定め、賞を行っている。

亦大来目(おほくめ)をして畝傍山の西の川辺の地に居らしめたまひふ。今、来目邑と号くるは、此、其の縁なり

今、田川市・香春町の地形を地図で見ると、一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳の西に金辺(きべ)川と彦山川が合流している。日本書紀の記述と現地形は一致している。「来目(くめ)」は「金辺」と変化したのであろう。田川市には「川宮」「奈良」「春日」などの地名がある。香春町・田川市こそが神武以降、九州天皇家が勇躍した「倭(やまと)の國」である。